

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	ちぎれ雲 : 文苑
Author(s)	卯の花
Citation	龍南會雜誌, 103: 25-30
Issue date	1903-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5645">http://hdl.handle.net/2298/5645</a>
Right	

に少年は泣き出した、兄は泣堪へずに顔をうむけた。更に一刀横一文字に加へられて十字に開かれた傷口からは膿交ぢりの血が流れ出る、K君は慣れたものでその中を斟酌なしに掻き交せる、少年の涕泣は他人の僕さへ聞くに忍びなかつた。況して兄の身になつては。

此の時ふと一人の亡弟を想ひ出した、嘗つて僕が彼とジャクナイフを争つた時誤つて母指を傷けたので彼は譬へ難き悔と同情おもんぱかりとの溢れた顔付きで心からあやまつたが、今その通りあり／＼と僕の眼前に現はれたので。

回顧すれば彼が亡くなつたのも丁度此の少年の年ごろであつた。

ちぎれ雲

卯の花

おもへば心あやしくも動かるゝかな、今夏君と暑を湘南に避けて、潮寄せ鷗翔るほとり、海土万斛の涼風に對せしは已に過去の夢となりぬ。當時相共に青春の希望を語りていかに思よこしま邪なかりしぞ。たわいなきことに興を催ふしては笑ひさゝめき、はた君が手づさむ寫生畫の拙なきに一驚を喫して拍手して笑ひしこともありしなり、今や瑤落の秋たけ、悲風空しく遊子の愁を吹く、人生岐路多くして君は信濃路遠く山に入り、われは筑紫瀉遙かに杏城の客となりぬ。空を眺むれば茫茫として雲漠々、海を望めば洋々として水漫々。落葉しげき夕、君はかの時のことしのび出づるやいかに。

文

一葉の扁舟に涼風を趁ふて、茅島あたり漁りするや、まこと獲魚は少なかりき。されど松くねる危き岩が根に踞して海洋の夕景をめめし時、いかに感深かりしぞや、想像の翼は快感に駕して遠く沖ゆく眞帆片帆に伴なひ、われ知らず唱い出せし讚美歌の、松の籟に和して磯の彼方に響き渡りし時砂にさわぐ波の調もおのづから平和の象を示せしにあらすや。タイムは流れくつてすべてを忘却の冥府に葬り去るも相思ふ清き情をいかにせんや、君と別れてし今、かの時を追懐ふ心のいや増るかな。あゝ君かき鳴らす吾妻小琴の音、潮のさくやさ妙にやさし。君や調ぶる十三絃の音、稍にふせぶ秋風の聲いと疾し。潮汪々風蕭々、君よ若葉の夢なほありや。

されど君よ悲愁はわれらの事にあらざりけり。願くは顔をあげて夕榮の空を見よ、淡紅の雲ゆるく流るゝ所、平和の象悠悠たるにあらすや。雲間より射る光の征矢は楓の林に入りて一しは華かに、映るふ水の面に琥珀の色を流すなり。君よ神の榮光をこの平和の天地に見ざるか、愛の姿を仰がさるか。君よしばらく心霊の奥殿を開き、以て愛なる父と交通せよ。あゝ如何にその樂しきかよ。われ等は斑点も汚穢も拭はれ、憂きも悲みもみな慰められんなり。愁ひに沈む君よ、夕陽没する間の暫時を祈禱の時に費やし、恵みと康きを享受よ、而して西の空なるわれと靈の交を成さしめよ。うよぐ夕風、ひびく暮鐘、何れかこれ相思の情を通せざるべき。

苑

珍しくも確永味の色濃き紅葉送り給ひし君のいかに優しきかよ。懐しき君よ、山路遙かにしら雲多  
 き郷に去りにし君よ、紅の血潮に染みたらん如き一葉二葉の楓の色に、君が赤き心をわれは謝す。  
 あはれ、萩の友摺れ、ろくに幽韻をかなづるあらば、これ風に托せるわが應酬の響と知らずや。

君よ、悲愁はわれ等のことにあらずとわれは云ひき、されど君よ、若きわれらになどて愁のなからざ  
 らんや、いと聖く高き愛の力にはだされて、人の世に超然として罪の思ひは去れど、あゝ若きわれら  
 に血潮の燃ゆるをいかにすべき。血潮の燃ゆる時そこに罪のおもひたへやらせ、戦<sup>ま</sup>く心を鞭うちて清  
 き心を勵ませど、若きわれ等は憂ひなり、あゝ能はざるなき天の神よ、願くは嫉み、忌み、羨み、恐り、  
 恨み、歎く心を去り、愛の甘酒に酔ひて花の間に戯むるゝ蝴蝶の平和の姿、優しき心を與へ給へ。こ  
 れわれらが盡きざる願なり、あゝわれは長へに君と共に青春の希望を追はん、而して測られざる神  
 の愛の内に在りて人生の向上を完うせんかな。願くは祝福君に在れ。

東の方星一つ流れ行きぬ、汝れよいかなれば罪の此の世を戀ひて來りしや、いと高き所にもまた歎  
 きたへざるにか、天の高きを捨てて地の低きにつき、とこしへの悲み味ひて苦しみ悶ゆる星ぞげに  
 憐れなる。戀を求めて泣く若き子等よ、流れし星の行く先を探ねて、而して慈愛の眼を以て見給ふ神  
 の光の清く尊く、いかに慕しきかを學べ。明星はとほに眞如の光りを放ちて笑み居るにあらずや。

日もやうく暮あいの鐘の韻、きつたどるは繪津湖の長堤、憂ひを含める雲は林に隠れ、眉より細き三日月は松のあはひにきらめきぬ、淋しさの餘り又も催さるゝは懷舊の情、有りし昔の俤になん。御月さん幾つ十三、七ッ其れ又若いね……」とは幾度か乳母の脊にて云ひけん言葉なるか而も今同じ月に對して美しき心に眺むる能はざるは如何に悲しき業なるよ。

たゞいたづらに月を眺めて泣くにあらず。胸の思ひにたへかねて、かの仲麿が唐越にて「三笠の山に出でし月かも」と云ひしが如く、我れまた心のさまゝにて、そこはかどなく世の憂ふしも思ひ出さるゝなれ「一夜不眠孤客耳、主人門外有芭蕉」の句を難じて「芭蕉葉上無愁雨、耳是多情聽斷腸」と正せしも實にさる事ぞ思はる。心の雲を去りて汚なき真如の月を眺めたらんにはいかに嬉しからん、いかに樂しからん、あゝ重き罪の荷、いためる我が心は、げに堪む得ざるなり。

あ、はかなきの人生や、長しと云はゞ五十年、短しと云はゞ五十年、たれか此の間の奥妙なる秘密を解するものぞ、神のみ獨り是れを主宰し給ふ。Larry cornwall の *Life* を讀み人生の不可解を疑ひ去つて其攝理を學び再びロントクフェローの人生觀に行け。

*Life*

Cornwall

We are born; we laugh; we weep;

We love; we droop; we die!

Ah! wherfore do we laugh or weep?

Why do we live or die ?

Who knows that secret deep ?

Alas, not I !

Why doth the violet spring

Wseen by human eye ?

Who do the radiant seasons bring

Sweet thought that quickly fly ?

Why do our fond hearts cling

To thing that die ?

We toil—through pain and wrong ;

We fight—and fly ;

We love ; we lose ; and then, are long,

Stone-dead we die.

O life ! is all thy song

“ Endure and-die ? ”

○

『われはシャロンの野の谷の百合花なり』荆棘の中の百合花、森の内の林檎、甘き其の實、實に我れ  
の力なり、われは葡萄の甘き酒に酔ひ、神の愛の御手に抱かれ靜かに眠る小羊たらん、

『われはシャロンの野の谷の花なり』『ソロモンの榮華の極みだに我れには及ばざりき』。

### 新体詩

### 夢の香

(わが故郷の詩友曉聲に與へたる)

○その一

内 田 夕 闇

ふる里遠くはなれ來て

迷ふは阿蘇のふもと原

何慰めの花もなく

迷ふは阿蘇のふもと原

笛聲<sup>ふえ</sup>を得ざりし小羊の

力つかれてあゆみより

人になさげを乞ふ如く

かうべを垂る、暮の闇

あけぼのひとり目覺めては

森の木蔭に露おびて

羽風もかるき白鳩の

やさしき君を思ふかな

よべ夢に見し君が笛

いつひびくかと疑はれ

彩<sup>のそみ</sup>ある雲の間をば

希望<sup>のそみ</sup>に饑ゑて窺ふを